

1543年（天文12）年、ポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲を伝えたことは有名な話である。そして6年後にはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着して、キリスト教の宣教を開始した。その後も、ポルトガル人が次々と日本に来航した。ヨーロッパの世界進出がついに日本に及んだのである。16世紀末にはフィリピンからスペイン人が到来した。彼らは南蛮人と呼ばれた。ヨーロッパから渡来したもので重要なのは鉄砲とキリスト教であった。キリスト教は、ポルトガルの商人とともにやって来た宣教師たちによって布教された。宣教師たちは病院や孤児院をつくって人々の心をとらえた。貿易の利益に着目した西日本の大名たちもキリスト教を保護し、自ら入信する者もいた。（キリシタン大名）。長崎、山口、京都などに教会（南蛮寺）もつくられるようになり、キリスト教は九州、中国、近畿地方に広がった。

1579年、ローマからアレシャンドロ・ヴァリニャーノという宣教師がやってきた。彼はキリスト教の布教のためには日本人のパードレ（司祭）を育てなければならぬと、島原半島の有馬と織田信長の城がある琵琶湖の畔にある安土にセミナリオという学校をつくった。この学校には家柄がよい優秀な9歳から15歳くらいの少年を集めて、勉強をさせその中から宣教師になれる人を期待した。さらに帰国にあたり、少年達をヨーロッパ、ローマ教皇のもとへ連れ見聞を広めさせることを思いつき、1582年（天正10）には九州の大友義鎮後の宗麟などのキリシタン大名が、4人の少年をローマ教皇に送ることになった（天正派欧使節）。また、この時期、日本人の東南アジアへの進出が本格化した。



中浦ジュリアン 原マルチノ 伊東マンショ 千々石ミゲル

ALEXANDR VALIGNANUS S. I. O. S. P. VII

メスキータ神父

左から：中浦ジュリアン（副使節）。 原マルチノ（副使節）。 伊東マンショ（正使節）。 千々石ミゲル（正使節）。 以上4人の後見人として、修道士ディオゴ・デ・メスキータ（ポルトガル人教師、マカオでパードレとなる）、修道士ジョルジ・ロヨラ（日本人教師、通訳）、従者コンスタンチノ・ドラード（日本人）、従者アウグスチノ（日本人）。いずれも洗礼を受けたのでクリスチャンネームとなっている。

一行が長崎を出港したのは、1582年（天正10）2月20日。長崎を出てから17日目、ポルトガル領マカオに着いた。使節一行は風待とのため9ヵ月足留めを食らったが、その間、丘の上のペンニャ修道院で学習を続けた。マカオから南に行くにしたがって、気温は上がり、照りつける太陽はますます厳しくなった。海南島の近くでまた海が荒れた。マレー半島の先、マラッカは城壁に囲まれた要塞のような町だった。スマトラ島が見えなくなって、いよいよインド洋に乗り出した。これから2か月の船旅でインドへ。毎日が猛暑と大海原、飲み水が少なくなり節水。無風となり風待ちの状況が8日間も続く。伊東マンショが熱を出し寝込んでしまう。もう少しでコチンという所で、船が岩礁に乗り上げ、ボートで南インドに上陸、陸路でポルトガル人の根拠地であるコチンへ。コチンでは半年もの風待ちをすることになった。その間、勉学に励み楽器の練習もした。コチン滞在中、パードレ・ヴェリニャーノにローマから東洋イエズス会の最高責任者とインドに留まれという命令があった。替わりはメスキータが指揮をとることとなった。コチンを出発したのが2月20日、赤道を越えて喜望峰に着いたのが5月10日、70日もかかった。岬をまわって、17日後、サンタ・エレナという小さな島についた。（この島は300年後ナポレオンが流刑された）。島には11日間滞在したが、この間、何故か32名もの水夫が他界した。そして、

スペインへ

グアダルーペのヘロニモ修道院はスペイン随一の参詣者が多いところ。ミゲルが疱瘡にかかり5日間滞在。続いてトレドには男子修道院13、女子修道院23、病院が8つあり25千人もの住民が住んでいた。ミゲルの回復を待って20日間滞在。この間、天球儀の発明家で有名なトリアーノを訪ねた。10月19日、マドリードに向かった。ところが途中、今度はマルチノが疱瘡になり熱を出したが、4頭立ての馬車4台もの出迎えがあり、なんとかマドリードに到着した。11月11日、スペイン国王フェリペ二世の6歳の皇太子宣誓式に招待され、5時間に及ぶ儀式を拝見。その後フェリペ二世に謁見。歓待を受ける。マドリードから北西51km、国王差し回しの馬車で大建築エル・エスコリアル宮殿に宿泊。(国内の旅はほとんど屈強なアラブ馬に引かれる馬車によっていた)



グアダルーペ 王立修道院



トレド全景



スペイン国王フェリペ二世

11月25日、国王に見送られアルカラへ。12月2日、花火の歓迎の下、ベルモンテへ。ここでも歓待され3泊して12月10日、ムルシアへ、3000人の兵隊と祝砲を受け歓迎される。ここでクリスマスを過ごし、1月3日出発。二つの町を通り、港町アリカンテに着いた。港にはすでに国王差し回しの二本マスト、海賊に備えて34門の大砲と兵士を乗せた船が待っていた。イタリアまでの航海は、順調なら20日足らず、イタリアに上陸してから20日足らずでローマに着くとのことであった。しかし、風待ちのため1か月余り滞在。ロヨラ修道士(日本人)は印刷術習得のため、リスボンへ戻ることになった。



アルカラ



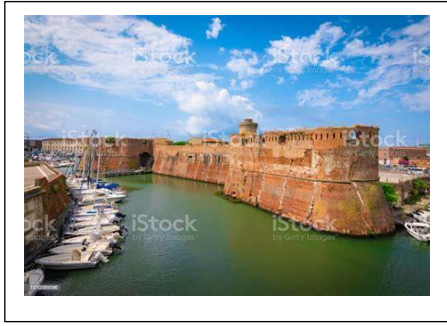
ベルモンテ



アリカンテ

イタリアへ: 一行はマジョルカ島を經由してイタリアの西海岸リヴォルノ港に着いたのは1585年3月1日。当時はトスカーナ大公国と言って、君主はメジチ家のフランチェスコ一世、その都フィレンツェはルネサンス芸術の一大中心地として知られていた、大公は一行をピサの宮殿に泊まるよう命じた。歓迎会では大公妃に誘われ初めて慣れぬダンスをした。ピザ滞在中、斜塔や大聖堂、ピザの広場、動物園では10頭のライオンを見て驚いた。(リヴォルノ～ピザ間20km～ピザ～フィレンツェ間69km)

3月6日、大公の歓迎はピサからフィレンツェに移った。ヴェッキオ宮殿に宿泊。フィレンツェの都は、アルノ河があって、レンガと石で造られた美しい橋が4本かけてあった。家々は大きく7階建て、天主堂や修道院の数は数えきれない。住民はとても裕福である。3月13日、大公の命を受けて一行はトスカーナ大公国のシエーナに着いた(フィレンツェ～シエーナ間60km)。



リヴォルノ港



フィレンツェ ヴェッキオ宮殿



シエーナ全景

使節団がローマに着いたのは 1585 年 3 月 22 日。長崎を船出してから、3 年 1 か月、33,800 km の旅であった。



ローマ教皇グレゴリオ 13 世は、はるか日本からキリストの王侯の使節が、恭順を誓いに訪ねて来たことを聞いて非常に喜んだ。84 歳と高齢の教皇は、もはや余命残り少ないと悟り、使節の少年達の到着だけを楽しみにしていたのだった。3 月 23 日、ついに教皇グレゴリス 13 世に謁見。教皇の目には涙があふれていた。まずマンショが御足に口づけすると、教皇は身体をかがめマンショを抱いた。ミゲルも同じようにすると、教皇の目からは涙がとどまることはなかった。教皇は長崎からリスボンまでの航海のことや、日本のキリストンについて小さなことまで

質問された。マンショが持参した親書を奉呈。翌日、教皇からローマ滞在費として一千金、イタリア風の洋服とローマ市民権が与えられた。さらに 4 月 3 日、教皇からお招きがあり、日本から持参した安土屏風（信長からいただいた）、竹製小机などを献上した。教皇は日が落ちるまで少年たちと過ごしたが、数日後日お亡くなりになった。5 月 5 日、新教皇シスト 5 世の聖堂受領の儀式に参列。6 月 3 日、使節一行は 2 か月と 10 日にも及ぶローマ滞在を後にした。（リヴォルノ～ローマ間、列車での移動距離 254 km）

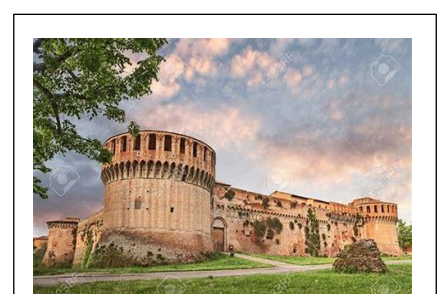
その後、チヴィタ・カスラーナ、スポレット、モンテ・ファルコ、（いずれも手持ちの帝国書院基本地図帳に記載なし。一日馬車で移動した町か）アッシジ。アッシジの聖堂、カメリーノ、レスカーナ、12 日、100 日ぶりに海（アドリア海）を見る。14 日、市民の大歓迎大きな花火を受けてアンコーナに着く。15 日、ペーザロ。18 日、イモラ、どの町でも歓迎を受けながら 19 日ポローニャに着く。（ローマ・ポローニャ間距離：309 km）



アッシジの聖堂



ロレート



イモナの落日

ポローニャの市に入る前から枢機卿のお迎えの馬車が 100 台にも及んだ。大司教と教皇使節より食事に招待される。21 日：フェラーラ公国に入る。君主アルフォンソ公の宮殿に宿泊、大晩餐会が催され歓待を受ける。3 泊しベネチア公国へ。ポー川を二階建ての豪華な船に乗ってベネチアへ。

ベネチアは 450 もの橋があり、サン・マルコ広場の大教会をはじめとし 150 もの教会が聳え、その眺めには感

嘆するばかりだった。大統領ニコロ・ダ・ポンテは95歳という高齢、表敬訪問。7月4日、お別れの挨拶に参上した際、大統領から数々の贈り物をいただいた。一行はイタリアでの5カ月にわたる旅を終えてジュノバから船に乗った。



出典：帝国書院、基本地図帳



ポローニャ アルフォンソ宮殿



ベネチア サンマルコ広場



ジェノバの港

地中海での航海は順風に恵まれて、僅か8日間で、8月16日、スペインのバルセロナに入港した。ジュリアンが船の中で4度目の発熱をし、郊外の別荘を借りて一同、25日間休養した。9月9日、バルセロナを出発。9月14日、モンソンという町に着いたが、思いがけないことにスペイン国王がこの地の離宮に滞在していることを知り表敬訪問。国王とは10ヵ月振りの再会であった。国王は大変お喜びになられ、リスボンまでの旅費はかりでなくインドまでの費用を出してくれることになった。前に歓待を受けたアルカラを発つとその日のうちにマドリードに着き3泊。マドリードからはトレドには行かず、国境を越えポルトガルの町、ヴィソーザに着いたのは10月末になっていた。11月初旬エヴォラに入り歓待を受け、およそ1年3ヵ月振りでリスボンに戻った。12月の半ば、テージョ河を船で1日余り遡ってコインブラへ向かった。コインブラはリスボンに次ぐ大都市で大学があり訪問し、学生たちに歓迎された。



バルセロナ サンパウ病院 ↑



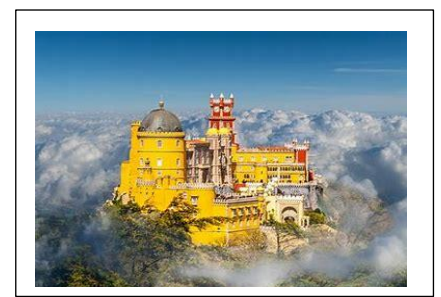
コインブラ 大学

モンソン 国王離宮 ↑



バターリャ修道院

エヴォラ大聖堂 ↑



シントラ ベーナ宮殿

帰国の途

1586年1月9日、日本を出てから4年目、院長が用意してくれた船でコインブラを後にし、リスボンへ向かった。4月8日、一行はサン・ロケ修道院の人々に見送られて、サン・フェリーペ号に乗り込みポルトガルを後に帰国の途に着いた。海賊に備えて一度に38隻が出航したからテージョ河の川べりは見送りの人々で一杯だった。

順調に航海を続け、5月に入り赤道付近で31隻の船団と別れた。赤道を越えたのが5月6日頃だった。その後、7隻は船団をといてブラジル行きと別れ、一気にケープタウンを目指した。5月27日、強風で帆げた（帆柱の上に横にわたす材）が折れる事故があった。そして7月7日、ケープタウンを廻った。その後、大陸に沿って北上。無風、座礁、難破の危機があったが、9月1日、ポルトガル領モザンビーク港に着いた。ところが、2月にインドを発ちポルトガルに向かっていてサン・ロレンソ号がケープタウンの手前で暴風雨に遭い船体を破損しモザンビークに引き返していた。モザンビークには修理設備はなく、サン・フェリーペ号の到着を待っていたというのだ。両船長の話の結果、サン・フェリーペ号はサン・ロレンソ号の積荷を積んでリスボンへ引き返すことになり、少年使節団はインドからの迎えの船を待つことになった。そして翌年の3月15日、インドからの迎に船が来てモザンビークを出発。5月29日、やっとゴアに着いた。ゴアと次の寄港地マラマラッカの間はおよそ一つ月余の航海と言われていたが、風が不順でマラッカに着いたのは7月1日となった。マラッカには12日間滞在し、13日出帆。マカオへ向かい29日目の8月11日、マカオに着いた。

しかし、そこでマンショの殿様大友義鎮、ミゲルの殿様大村純忠の死を知った。さらに天下を取った豊臣秀吉がバテレン（神父）追放令を出したという事知ったのであった。結局、マカオには2年近く滞在することになり、8年5か月の長旅から遣欧使節の一行は、1590年7月20日にやっと、夢にまで見た長崎に帰って来た。

11月上旬に関白秀吉の許しが出て一行は上京し謁見の日を待った。翌年の1月25日、関白秀吉から上京せよとの命令が出た。秀吉公は機嫌よく一行を迎え、代表である伊東マンショに「予に仕える気持ちはないか？」と言ってくれたが、「ヴァリニャーノ様に受けた大恩に報いることが、これからの勤めです」と答えた。秀吉は「9年も仕えたのだから無理もなからう」と意外にあさりと認めた。聚楽第で四人は南蛮楽器での合奏を披露、初めて聴いた西洋楽器に魅せられた秀吉は三度も繰り返し演奏させた。

それからの一行が待ち受けた運命は迫害の嵐であった。ヴェリニャーノ（日本巡察師、パードレの頭）は、1592年10月、日本を去りゴアに戻り1609年没。使節のよき教師であったパードレ・ディゴ・メスキータは、国外追放を望まず、1614年、長崎の海岸にたたずむ獵師小屋でさびしくこの世を去った。伊東マンショは島原のセミナリオの教師となりパードレに叙され、徳川幕府の厳しい禁教政策の下で病気のため43歳で亡くなった。千々岩ミゲルは棄教して、従兄弟の大村善前公にもとに身を寄せた。原マルチノはパードレ（司祭）となったが、追放されマカオに渡った。中浦ジュリアンはパードレの身を隠し、九州各地のキリシタン衆徒を世話。1633年捕

らえられ長崎で逆さ吊りの刑に処せられた。65歳。身体が一番病弱でしばしば病になったが一番長生きした。
一行が持ち帰った文物：活版印刷機、西洋の楽器、絵画、海図。アラビア馬一頭（秀吉に献上）（完）

参考図書：「ローマをめざして～天正少年使節の物語～」 鶴 良夫著 リーベル出版

「天正の少年使節」 松田翠鳳 小峰書房

「新しい歴史教科書」 扶桑社

挿入写真は、いずれも無料画像によった。